



SEIG

LIB-NEWS

2019年7月4日発行

聖学院中学校高等学校

図書委員会

Topics

長い期末テストも終わりましたね！これから夏休みですね、海の浅瀬には気を付けてくださいね～

中・高校 II年 B組 氏名 H. H.



疲れた者に癒しを与えるぶた館長

おすすめの本

書名 流星の絆

著者 東野圭吾

請求記号 913H

「流星の絆」は、2008年に二宮和也くん主演でドラマ化もされた人気小説で、事件で両親を殺された三兄妹が犯人を探し復讐する推理小説です。

中・高校 2年 A組 氏名 Y. E.

おすすめの本

書名 凍える牙

著者 乃南アサ

請求記号 913.611N

ある日、一人の焼死死体が出た。その犯人を追う滝沢刑事、音道刑事。犯人が意外な生物で驚きます！

中・高校 2年 B組 氏名 U. F.

7・8月 開館予定カレンダー

7月	日	月	火	水	木	金	土
	7	8	9	10	11	12	13
	14	15	16	17	18	19	20
8月	21	22	23	24	25	26	27
	28	29	30	31	1	2	3
	4	5	6	7	8	9	10
	11	12	13	14	15	16	17
	18	19	20	21	22	23	24
	25	26	27	28	29	30	31

- 斜線は閉館日です。それ以外は8:00-17:00で開館します。
- 読書・受験勉強・夏休みの宿題・規則正しい生活のためのリズム作り・2学期に向けての登校リズム作り等に図書館を利用しましょう。

57 理科I先生 → 58 国語科U先生 → 59 数学科H先生 → 情報科I先生 → 61 理科I先生 → 62 英語科N先生 → 63 美術科I先生 → 64 英語科H先生 → 65 理科I先生 → 66 数学科K先生 → 67 理科S先生 → 68 技術科T先生 → 69 英語科S先生 → 70 英語科M先生 → 71 英語科T先生 → 72 英語科S先生 → 73 英語科K先生 → 74 英語科M先生 → 75 英語科I先生 → 76 英語科S先生 → 77 英語科K先生 → 78 英語科M先生 → 79 英語科I先生 → 80 英語科S先生 → 81 英語科K先生 → 82 英語科M先生 → 83 英語科I先生 → 84 英語科S先生 → 85 英語科K先生 → 86 英語科M先生 → 87 英語科I先生 → 88 英語科S先生 → 89 英語科K先生 → 90 英語科M先生 → 91 英語科I先生 → 92 英語科S先生 → 93 英語科K先生 → 94 英語科M先生 → 95 英語科I先生 → 96 英語科S先生 → 97 英語科K先生 → 98 英語科M先生 → 99 英語科I先生 → 100 英語科S先生

27 美術科I先生
28 美術科S先生
29 数学科S先生
30 国語科A先生
31 数学科S先生
32 保健体育科T先生
33 看護S先生
34 英語科K先生
35 英語科M先生
36 英語科I先生
37 英語科S先生
38 事務長Aさん
39 英語科K先生
40 英語科M先生
41 英語科I先生
42 英語科S先生
43 英語科K先生
44 英語科M先生
45 英語科I先生
46 英語科S先生
47 英語科K先生
48 英語科M先生
49 英語科I先生
50 英語科S先生
51 英語科K先生
52 英語科M先生
53 英語科I先生
54 英語科S先生
55 英語科K先生
56 英語科M先生
57 英語科I先生
58 英語科S先生
59 英語科K先生
60 英語科M先生
61 英語科I先生
62 英語科S先生
63 英語科K先生
64 英語科M先生
65 英語科I先生
66 英語科S先生
67 英語科K先生
68 英語科M先生
69 英語科I先生
70 英語科S先生
71 英語科K先生
72 英語科M先生
73 英語科I先生
74 英語科S先生
75 英語科K先生
76 英語科M先生
77 英語科I先生
78 英語科S先生
79 英語科K先生
80 英語科M先生
81 英語科I先生
82 英語科S先生
83 英語科K先生
84 英語科M先生
85 英語科I先生
86 英語科S先生
87 英語科K先生
88 英語科M先生
89 英語科I先生
90 英語科S先生
91 英語科K先生
92 英語科M先生
93 英語科I先生
94 英語科S先生
95 英語科K先生
96 英語科M先生
97 英語科I先生
98 英語科S先生
99 英語科K先生
100 英語科M先生

◎先生方のリレーエッセイ◎ 第70回

英語科 林 正人 先生

図書館のコラムを書くように、との有り難いお声掛け、でも書くことがまるでないでと心底途方に暮れていたなら、ぎりぎりアンテナに引っかかっていた。2年前のアメリカ映画 Ex Libris-The New York Public Library (邦題：ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス) の日本封切りである。3時間25分。ネットでロコミを検索したら、当然の賛辞に混じって「凡人にはきつい。日本と違いすぎ、羨ましいを通り越して、もはや神の域」などというのがあった。

…それな…。

僥倖にも近所に図書館があり、気になる本はわりあい読むことができた(出版業界の敵というわけだ)が、睡眠負債が募れば本は読めなくなる。頁を開いたって、たちまち寝落ち、なんてかわいいものではない。そもそも開かなくなるのだ。週に一冊どころか、ほぼ放置プレーのまま期限の1ヶ月も過ぎ、またも、ぼとりと返却箱に落とす時だって、もう情けなさも感じない。日本国憲法第25条は「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」と謳うが、国はその実現のための具体的な措置を講じる義務など負っていない(画餅、もといガビン)と最高裁が喝破してもう半世紀(嗚呼! もとい、はあ? プログラム規定説)。アンパンマンのマーチは、こう歌っていなかったか。「♪何の為に生まれて、何をして生きるのか。答えられないなんて、そんなのは嫌だ! 今を生きることで熱いところ燃える。だから君は行くんだ、微笑んで。そうだ! 嬉しいんだ、生きる喜び。たとえ胸の傷が痛んでも!」!

「英語を話せると、10億人と話せる」という前世紀の英会話教室のコピーはよくできていた。10億が多いか少ないかはわからないが、この世の中を、世間を、世界を、どうやって知り、翻って、そのただ中で、自分はどのように生きるべきかを悟る決め手は英語なんだよ、などと例えば囁かれたとしても「♪心寒いだけさ(詞 来生えつこ)」。人が「パンのみにて生きる」のではなく「神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」のだとしたら、如何にして神と隣人を知り、返す刀で如何に自らの生き方を定めるのか。「君たちはどう生きるか」と問われているのは、きょうび子どもより、まずわたしたち、いやわたしなのだ。自由とはこの責任だ、どうして、ただの幻想なんかでありえようか。

かの映画の公開記念パネルディスカッションで、国立国会図書館総務部長の田中久徳氏はおっしゃった。「結局、情報や知識というものにアクセスできるということが、いかに個人として自立して、そして、社会を支える一員として、さらに人間らしく生きていく上で、重要になるのか、ということだと思います。もっと生活レベルのことかもしれないですけど。それを支えていく役割は、この近代的な民主主義の中で、日本においても当然同じだと思うんですね。」そう、これはお堅い教養主義なんかじゃない。まさに人生の、生活の死活問題なのだ。神の域、などと遠い目をして指をくわえている場合ではない。

大きな価値のあることをゼロから考え出せる人というのはまずいない。[中略]人間の頭脳は、複雑なアイデアを一つの塊にまとめたり、別のアイデアと組みあわせてもっと複雑な集合にしたり、その集合をさらに大きな装置へとまとめて、それをさらに別のアイデアと組みあわせたり……ということは何意なのだ。だが、それをするには、途切れなくプラグインや部分組立品が供給されることが必要であり、それは他の頭脳とのネットワークなしにはあり得ない。地球規模のキャンパスは、単にアイデアの複雑性を増すだけでなく、その質を高めもする。[中略]文芸共和国においては、当然ながら迷信や教義、伝説などの寿命は短くなり、犯罪のコントロールや国家の運営についてのまずいアイデアも短命に終わる。

スティーブン・ピンカー「暴力の人類史 上」p.328

いかにも、わたしの国籍は天にある。ついでに住民票は、と言うと、この Republic of Letters にあるんじゃないかと思っている。「文芸共和国」なんて訳されると敷居が高いようで怖じ気づいてしまうから、「本のワールド」くらいがいいか、いや、そんなによくもないか。ともかくこのどす黒い dark satanic mills 的「現実」と Republic of Letters のいったいどちらがパラレルワールドなのか、よくわからなくなってきたなぞと呟いたら、落ち目気味のマルクス大先生には「キリスト教だけでは足りないか…」と、とことん憐れまれるかもしれないが、どっこい、こちとら、このブラックな「現実」の痛みを、その場しのぎでごまかして結局は服従するしかないなんて思っちゃいない。むしろ逆だ。少なくとも意気だけは、この Republic で無様でも、なんとか巨人の肩にしがみついて、わたしはこれからも、この破れかぶれの人生を旅していく。だから、ここでは敢えて「犀の角のように」とは言うまい。冊数不足の件は中長期的な、もとい中期的な課題として、まあ、何とかすることとしよう。

余談よたん

「ニューヨーク公共図書館」…。「公共」と名づけられていますが、この図書館、実は「私立」図書館です。この世界最大級の私立図書館を支えるのは、多くの人からの膨大な「寄付金」。良質な情報を手に入れるにはお金と手間ひまがかかることを理解し、図書館にそれだけのお金を寄付する篤志家が多いアメリカ合衆国ってすごい! と思わされます。